

ジェンダー表記に関するアンケート 集計結果

2021年3月9日

日本新聞労働組合連合

ジェンダー表記に関するアンケート（編集職場の組合員対象）回答集計

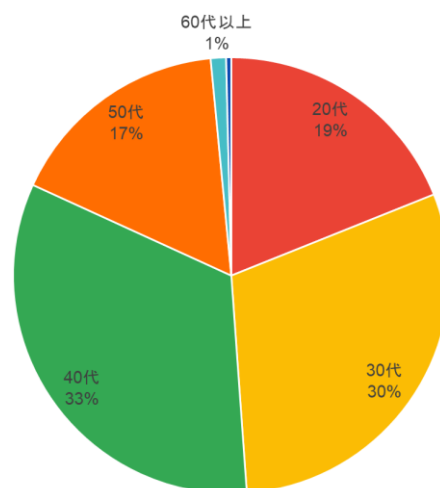
2021 年 3 月 8 日 新聞労連

回答総数 = 264 人

1. 年齢

年齢	人数
10代以下	0
20代	50
30代	79
40代	87
50代	44
60代以上	3
答えたくない	1

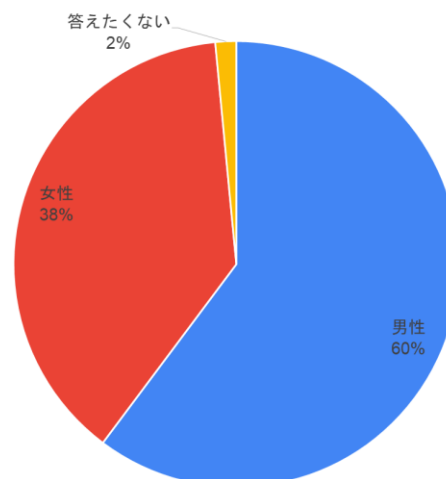
回答者の年齢



2. 性別

性別回答	人数
男性	159
女性	101
答えたくない	4

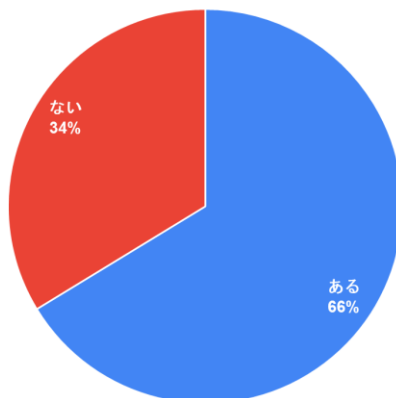
回答者の性別



3. 編集の仕事をしている中で、ジェンダー平等に配慮のない表現を見かけ、違和感を抱くことはありますか？

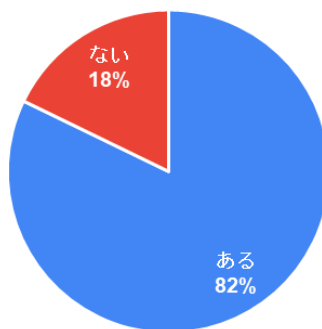
編集業務で感じるジェンダー平等に関する違和感

回答	人数
ある	175
ない	89

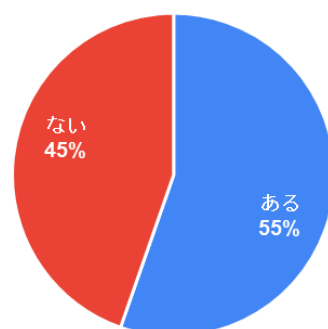


Q3	ある	ない	総計
女性	83	18	101
男性	88	71	159
答えたくない	4		4
総計	175	89	264

違和感を感じるか 女性



違和感を感じるか 男性

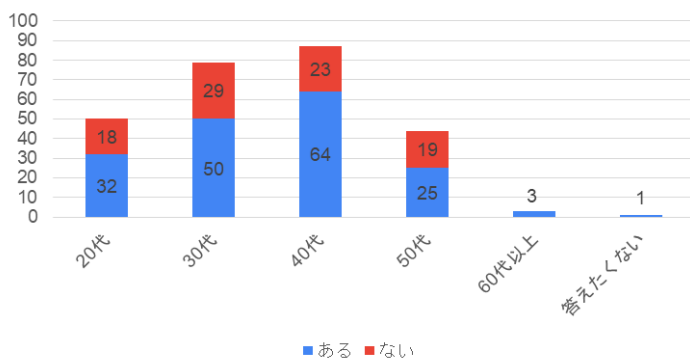


人数

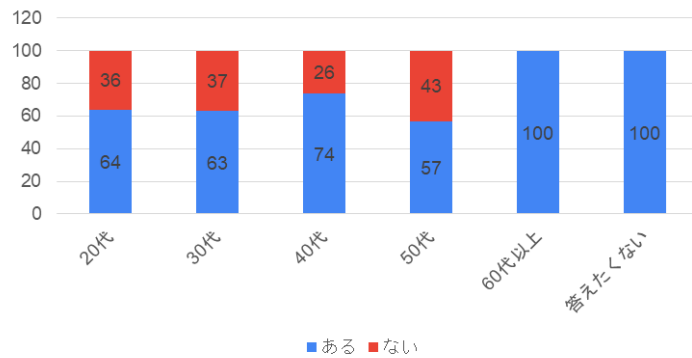
割合

	ある	ない	総計		ある	ない	総計
20代	32	18	50	20代	64	36	100
30代	50	29	79	30代	63	37	100
40代	64	23	87	40代	74	26	100
50代	25	19	44	50代	57	43	100
60代以上	3		3	60代以上	100	0	100
答えたくない	1		1	答えたくない	100	0	100
総計	175	89	264	総計	66	34	100

違和感を感じるか×年代別



違和感を感じるか×年代別 (割合)



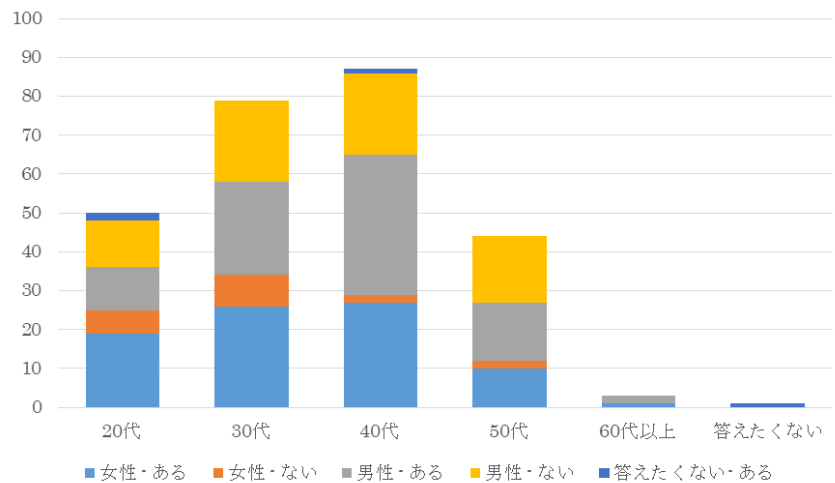
人数

	女性ある	女性ない	性別答えたくない-ある	男性ある	男性ない	計
20代	19	6	2	11	12	50
30代	26	8		24	21	79
40代	27	2	1	36	21	87
50代	10	2		15	17	44
60代以上	1			2		3
年代答えたくない			1			1
	83	18	4	88	71	264

割合(%)

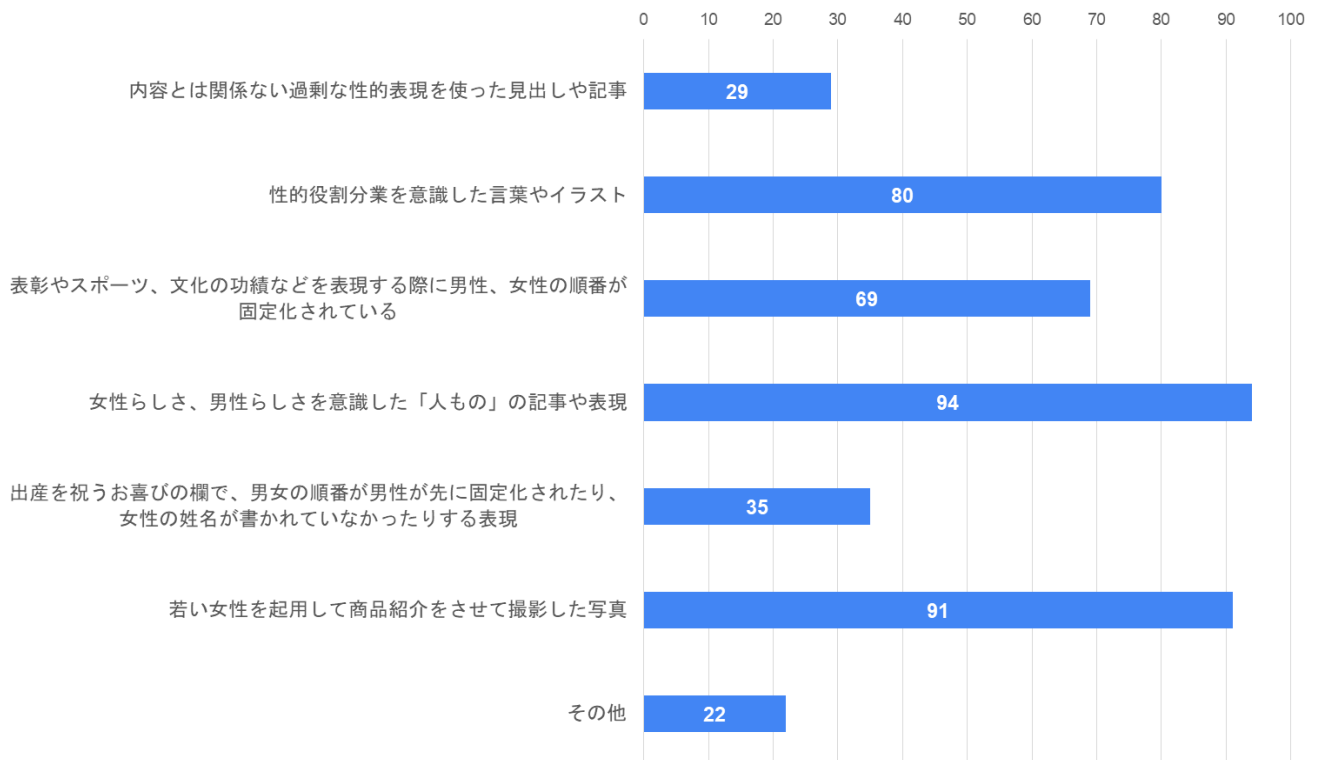
	ある	ない
20代女性	76	24
20代男性	48	52
20代性別答えたくない	100	0
30代女性	76	24
30代男性	53	47
40代女性	93	7
40代男性	63	37
40代性別答えたくない	100	0
50代女性	83	17
50代男性	47	53
60代以上女性	100	0
60代以上男性	100	0
年齢も性別も答えたくない	100	0
総計	66	34

違和感を感じるか×性別×年代別



3-2. それはどのようなものですか？（複数回答可能）＜Q3で「ある」と答えた人が対象＞

「ある」と答えた方にお尋ねします
それはどのようなものですか？（複数回答可能）

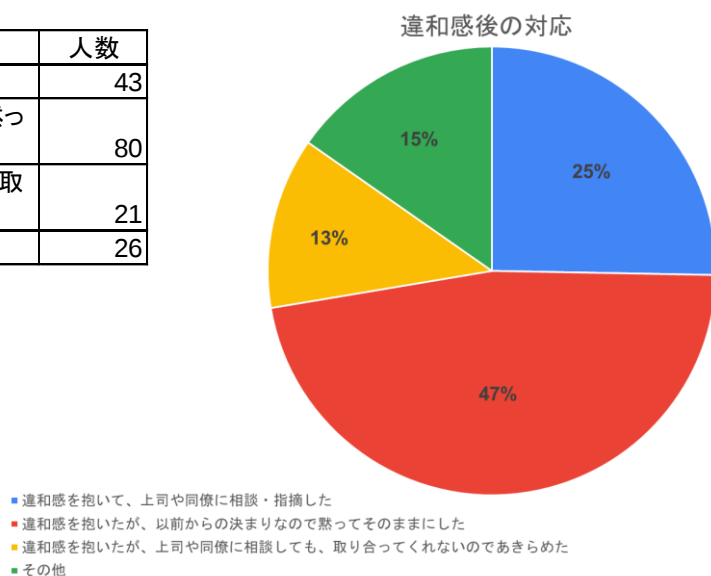


3-2 「その他」の回答の記述（主なものを抜粋）

女性問題の取材をするのは女性記者という風潮
性別の情報が不要な原稿や見出し。「女優」などの表現も相変わらず散見
選挙有権者数や統計記事などで、行政発表が「男性～人、女性～人」の表記に習って新聞も男女の順番に表記されているが、「あいうえお」順なら女性が先ではないかと思う。自分では「人数が多い方」を前にして原稿を書くなどしている
「車」や「列車」など、乗り物を「貴婦人」など女性に見立てた表現。読んでいて不愉快。また、テレビの女性コメンテーターなどの紹介文の最後に「〇児の母」と書いてある事が多いが、必要ない場合が多いと感じる。「この人はテレビでコメントを求められるくらい社会的に成功しているけど、子どもも産んでちゃんと女としての義務を果たしていますよ」というメッセージに感じる時がある
人事などで「女性初」をニュース価値にしているところ
デスクが社内で取材相手の女性のことを「あのおばさん」と表現する場面に度々出くわす。社内の意識改革が必要
女性というだけでポストが与えられる違和感
夫と妻、ではなく夫と嫁のような表現もしくはそれに準ずる表現
事件記事で男子高校生とはかかなくても女子高生、男性教師はかかなくても女性教師など、被疑者や被害者の性別が女性の場合のみ見出しや本文で女性と強調して書くことが多い。
〇〇女子、のような見出し/しなやかな、巫女的な、という形容詞
高校野球、社会人野球などのスタンド雑感の写真で「絵になるから」と若い女性の撮影をするよう指示される
そもそも登場人物が男性か女性か特定するのが当たり前になっている
アンケート結果、有権者数などを男女二通りにしか分類せず、表記すること
社モノではないスポーツで県勢がアベック優勝した際に、男子スポーツばかり大きく取り上げ、女子スポーツの方には記者すら派遣しなかった。同じ結果なのに、おかしい。上司の判断だったが、無意識に男性を優遇している
女性差別にこだわるあまり、逆に男性を叩けば良いという風潮の記事が増えている気もする。バランスが難しい
「女子大生」「女性警察官」など、女性を過度に強調する見出し
LGBT用トイレ
毎年、「風物詩」のように繰り返される甲子園出場高マネジャーの記事に辟易する。女子生徒が男子生徒のために「お守りを作った」「おにぎりを毎日握った」など、性的役割分担を強化させるエピソードのオンパレード。女子生徒がすすんでやっていることは分かっている。しかしメディアはジェンダー平等を推進する責任を自覚し、そろそろあの手のエピソードを美談テイストで掲載するのはやめるべきだ
世帯主は夫で、その妻が主体の農業系記事を書くときに、はじめに夫から書くようにと修正された

3－3. 違和感を抱いて、その後、どのようにしましたか？＜Q3で「ある」と答えた人が対象＞

項目	人数
違和感を抱いて、上司や同僚に相談・指摘した	43
違和感を抱いたが、以前からの決まりなので黙ってそのままにした	80
違和感を抱いたが、上司や同僚に相談しても、取り合ってくれないのであきらめた	21
その他	26



3－3 「その他」の回答の記述（各1件ずつ）

企業が用意した構図とは別に、自分で適切と思う写真を撮っている
取り決め上は禁じられているが、言うほどでもないと思ひスルー
過渡期なのでそのうち直るだろうと思った
自ら担当する記事や紙面で表現を気をつけるようにした
同僚が上司に取りやめるよう相談していたので賛同した
紙面のコラムで指摘した
話ができるような自由な空気がない
他の写真がないのでそのままにした
他部署、他支局の記事なので、相談・指摘はしていない
違和感を抱いて、指摘したこともあればそのままにしたこともあります
商品の他の写真も出稿したが、使ってもらえなかった
場合による。指摘したこともある。新聞業界では、性別による役割分業意識に無自覚な人も多く、言っても分からないだろうとあきらめたこともある
名前などで自分で順番を変えられるものはあえて変える
同僚と共有した
違和感のある記事が載ること自体にも意味があると考えてそのままにした
最近特に気にして見るようになった
違和感はあるものの社会通念上許容かとも考えた
指摘したり、忙しいときは黙したり、そのときどきで違う
指摘したこともあるし、しなかったこともある
違和感を抱いて、上司に相談・指摘したが取り合ってくれなかったが、あきらめない
さまざま、場合によって対応は違う

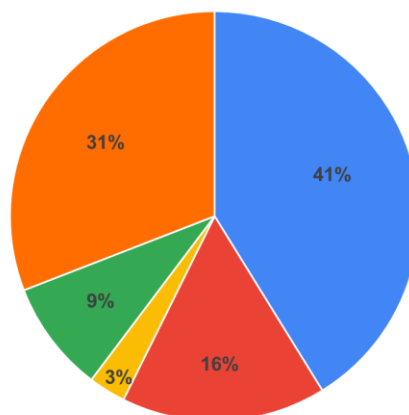
3-3 「その他」の回答の記述（各1件ずつ）

相談して直したときもあれば、そのような習慣なのだろうと黙ってしまったこともある
違和感を抱いて、女性を先にするなど原稿を変えた
夫婦が登場する際に、夫から書くことが多いが、妻からにしてみるなど、記者判断で変えられることは変える。ただ、上司に働きかけることはない
意見しましたが私の意見は流されました

3-4. その後、どのような結果になりましたか。＜Q3-3で「違和感を抱いて、上司や同僚に相談・指摘した」と回答した人が対象＞

項目	人数
上司や同僚に相談したあと、違和感を抱いた表現が、そうではない表現に変わった	28
上司や同僚に相談したあと、変えられない理由をつけられ、表現の変更には及ばなかった	11
ルール作りに至った	2
上司や同僚に相談したあと、相手にされず、表現は変わらなかった	6
その他	21

その後の結果



- 上司や同僚に相談したあと、違和感を抱いた表現が、そうではない表現に変わった
- 上司や同僚に相談したあと、変えられない理由をつけられ、表現の変更には及ばなかった
- ルール作りに至った
- 上司や同僚に相談したあと、相手にされず、表現は変わらなかった
- その他

3-4 「その他」の回答の記述（主なものを抜粋）

変わったもの、変わらなかったもの両方あります
その時々による
同僚とどうすれば良いのか話し合っている
表現が変わったこともあれば変わらなかったこともある
仕事仲間とその違和感を指摘することで仲間関係がおかしくなるほうが嫌だったので、そのまま放置した
意識していないからなのか、特になんの変化もありませんでした
「そうだね。それも考えないとね」と言われたが特に変化がない
何も変わらない
相談していない
表現の変更には及ばなかったり、「気にならない」の一言で却下されたり、ある時は修正されたりとさまざま
特にそれについて指摘はうけなかった
上司も分からない様子で「何でだろうね」と話は終わった
自分が関係する記事では気を付ける、関与できる記事では上司に言う
変わったり、変わらなかったりケースバイケース

3-4 「その他」の回答の記述（主なものを抜粋）

さまざま、場合によっていろいろな対応
デスクなので、自分で原稿を変えた。誰にも相談はしていない
女性側、LGBT に関する記事での違和感や問題点を見つけても、指摘するのは事実関係以外は不可能に等しい。逆に男性側に問題があるものの指摘は容易で是正しやすい
変わり者扱いされた。子どもと女性は紙面で目を引くから、との思考停止だった

4. 日頃、編集職場で仕事をしながら、ジェンダー平等に関わる表現について、取材や執筆活動において、問題だと思うことを自由にお書きください。主なものを抜粋

経済取材中心なので、ヒトに係わる案件（取材内容）は少ないですが、個人的には対外的な連絡・アポイントについて姓（名字）のみでやり取りするなど、性差が発生しないように心がけている。一方・・・時折ですが、ジェンダーに気を付けている、という体裁で、あえて「女性の」とか、「彼女」や、気色悪いものでは「～ちゃん」等々、先方に対して脚色して呼ぶ若い衆がいる。聞いていて（男性としても）不愉快だが、このあたりはリテラシーが低いことに起因していると思っているところ
読者投稿欄での「主人が」といった表現など、キリが無いと思いつつ「夫」に直してもらうなどしている。生活に馴染んだ、一般的な表現にこそ固定観念を補強する要素があり、悩ましい
女性弁護士、女優、女性議員など、職業の肩書きに女性をつけないようにしたり、年齢を必要以上に書いたりすることを避けるようにしている。ただ、編集者やデスクのなかには、そうした感覚にうとい人も多い。まずは時代に合わないジェンダー表現があることをみんなで勉強する機会があるとよいと思う。編集者やデスクなど記事を監修する人には必須であってほしい
経験上、年配層の記者がジェンダー平等に関わる表現について無頓着な傾向があるので、編集の場から外すべきだ
問題提起をしたくても、気づかずに記事として出てしまうことがある。ネットの釣り見出し的に、ネットで過剰に女性性が強調されていることもある。社内の一角で意識をもって取り組んでも、全社的に行き届かなければ努力は水泡に帰する。決定権者の属性が多様でないことも一因だと感じる。デスクをはじめ、権限のある女性をまずは増やす努力をメディアをあげて進めるべきだと思う。でないと、メディアへの信頼まで毀損してしまう
あまりにも性別の違いに対して騒ぎすぎだと思う。差別が差別を生んでいると感じる
見だしで「釣る」ジェンダーに関わる表現は不要では。例)「美人広報官」
問題に対する男性側の意識が低い
男らしさ女らしさなどの見出し多用
「造船女子」「歴女」やら、行政側が平気で売り込んでくることがあり閉口した経験がある
報道にありがちな、立場の弱い、もしくは、わかってない女の子たちに教えてあげるわよ的な、上から目線のジェンダー平等啓もう記事は共感の輪が広がりにくく、かえって反発を呼ぶので、垣根を低くして、真の平等に広げていく報道を心掛けなくてはと思っている
記者が書く原稿でどんなに気をつけても、4コマ漫画、ラテ欄、週刊誌の広告など権限が及ばないところに固定化されたジェンダー表現が氾濫していること
商品写真に女性の人を添えさせようとする。女性の人ものを取材するとき結婚やプライベートな質問をして、家庭があれば両立していることを記事にしてしまうこと。男性だとそうはならないので、

4. 日頃、編集職場で仕事をしながら、ジェンダー平等に関わる表現について、取材や執筆活動において、問題だと思うことを自由にお書きください。主なものを抜粋

自分自身にバイアスがあると感じてしまう
情報として性別が必要かどうか、いったん立ち止まって考える必要があるが、「違和感」を掘り下げずにルーティーンワークすることがある。年齢に関する情報も、そもそも必要なか疑問に思いながら、「原則載せる」こともある。新聞の場合は広告表現をどうするか。テレビや雑誌の見せ方をどう「規制」するか。その議論の方が先決な気がする
識者談話を取り上げるときは、男女同数にすべきだとの意見を聞いたことがある。それは行きすぎで、男性だろうが、女性だろうが、見識のある人を取り上げるべき。場合によっては、女性の識者2人だけがのっても問題ない。その逆もしかり。クオリティを維持することが最優先であるべきだ
女性については、子育てしながら、とか二人の子どもの母としてとかいう表現がいまだにある
問題というより、なにをもって平等なのか、人それぞれが違うので手探り状態だ
意思決定の場、たとえば用語ルールを検討する会議のメンバーがほぼ男性で構成されていたり、相談される立場であるデスクがジェンダー平等について時代遅れな感覚を引きずっていて、現代の基準にバージョンアップできていなかったりすること
男女1人ずつを記事で取り上げるとき、年齢などの差がない場合、男性から取り上げてしまいがちなこと
女子高校生や女子大学生を「女子高生」「女子大生」と略した表現を目にするとちょっと蔑んだような感じを受け嫌になる。「男子高生」「男子大生」とは言わないのに
ジェンダー平等への配慮を考えるあまり、生物学的な男女の差異に対する表現の萎縮がみられる
①野球のキャッチャーなど、中心人物を補佐する役割を「女房役」と表現するのは、40代の私から見てもかなり古臭い、というか思考停止の表現だと感じる ②女性を取り上げる記事で、結婚しているかいないか、子どもがいるかいないかに触れないといけなような雰囲気 ③「見たまま雑観」や写真説明などで、おそらく見かけだけで判断したであろう、男性、女性、男の子、女の子といった表現を目にすることがある。取材者・編集者は、性的マイノリティーも当然存在するという意識で表現方法を模索していく必要がある
ジェンダー表現の改善は重要だ。同時に、ジェンダーだけでなく、さまざまな偏見、マイノリティーへの無配慮にも立ち向かう取り組みであってほしい。例えば、悪気のない、ありきたりな「母子ともに健康」という1行に、障害のある人や家族が傷つくこともある。健康な状態ではなかった場合、この記事はどう書かれるのか。そんな前提は、ないことなのか。出産で命が失われることが多かった時代から続く表現を、右から左、ほぼ無意識に書かれているのではないか。ジェンダー問題改善への共感を広げていくには、立場の弱い、忘れられてしまいがちな人たちへの思いやりが不可欠だと思う
わいせつ事件などのウェブ見出しでは具体的な内容をとることが多く、どこを見出しにとるかで気を使います。よく読まれるというのも複雑です
紙面ルール作りには賛成。一方で、報道する立場にあっては、分かりやすく伝えつつ全ての人に配慮するのは限界があると感じている。例えば「性的少数者」と言われて気にしない人もいれば、不快に感じる人もいる。我々がどういう意図で表現しているかをしっかり示すことは、より多くの人への配慮

4. 日頃、編集職場で仕事をしながら、ジェンダー平等に関わる表現について、取材や執筆活動において、問題だと思うことを自由にお書きください。主なものを抜粋

につながると思う。その上で取材などの際に、個別具体的な希望があれば当事者に寄り添っていく姿勢を持つことも大切だ
多くの人からコメントを取るとき、男女の割合が同じになるようにしているが、あくまで戸籍上の男女であり、性自認は考慮していない。見かけ上は男女の平等に配慮しているが、多様な性が存在することを考えると、かえって取材対象を苦しめることになっていないか心配
女性、男性に記事中で触れてない内容に「ママ」「紅一点」などの見出しをとる、女性のみ家庭との両立について触れる、あえて「女性としてどう思うか」を聞く、「イケメン」「イクメン」などの表記。スポーツ、政治関係の記事の女性配偶者の支えを内助の功として評価するなど
女性が活躍するのは素晴らしいが、男性社会の中で勝ち抜いてきた女性ばかりに焦点を当てがちなきらいがあるので、家庭で夫や子どもたちを支えてきた女性たちに違和感を感じさせていないか懸念を持っている。女性の選択の幅が広がるよう、結婚や出産をしてもライフプランに合った仕事を続けられる支援体制や公的制度を構築する一助になるよう報道は心がけるべきだと感じる
表現については問題だと思うことはないです。それより、育休明けの女性の職場が偏っていたり、そういうことが問題なのではないかと思います
性犯罪の被害者女性が告発し、加害者とされる男性が否認している場合。報道機関はもっと中立であるべきだと思う
ポリティカルコレクトネスに配慮しすぎて逆にストレートの人が気を配らないといけなくなっている。配慮は当然すべきだが、LGBTQの知識があって当然というスタンスはどうかと思う
デスクが女性の取材相手のことを「あのおばさん」と度々表現し、不快
その感覚で紙面作りに携わっていてはいいものができる訳がない
女性に象徴的にポストを与えるのは違うと思う
女性にのみ、仕事と家庭の両立を聞かないでほしい。男性にも聞いて
過剰反応で言葉がりに終始している。男女平等は改めて確認するまでもない当然の理念だが、昨今の風潮はその範囲を逸脱している。人々の考え方は多様であってよいが、メディアは流されず、一つ一つ本当に問題か冷静に判断して報道すべきだ
管理職の認識が古いだけでなく、その自覚もない
取材における基本的な情報として男女問わず年齢を聞くが、女性に対しては一般に「年齢を聞くのは失礼だ」とされており、聞きづらかったり、あるいは聞いても答えてくれないケースがある。しかし、女性に年齢を聞かないのは「女性は若いほうがよい」と見なす男性中心の価値観に基づいており、本来ならば一掃されなければならないものである。最近は年齢を書かないケースも出てきているが、差別が解消された結果ではないことに留意するべきだと思う
俺の嫁、のような発言をする男性や、「嫁・女」と下にみるような上司（男女問わず）が40代以上にはかなり多くうんざりする。例えば選択的夫婦別姓については「姓を捨てさせられる」ことへの抵抗に思いをいたすことができない人が多い（ため紙面制作に世の流れを反映できていないと感じる）し、出産・育児・病気休暇については物理的に働くことが困難であるにも関わらず「女はずる休みする口実がある」というような陰口を男女問わず上司が平気で言っている。偏見や旧態依然の考え方しかできない人は昇進しないようなシステムに改め、マスコミ業界をあげてこの問題に真摯に向き合ってほしい

4. 日頃、編集職場で仕事をしながら、ジェンダー平等に関わる表現について、取材や執筆活動において、問題だと思うことを自由にお書きください。主なものを抜粋

男女の内訳を書くときに男性を先に書く場合
とにかく無自覚な人が多い。また、「今の時代こんなこと言っではいけないんだろうけど…」と言い訳をして笑いながら問題発言をする人もいる
女性記者が、たとえば国際女性デーや東京五輪組織委の森元会長の発言などを質問する、あるいは紙面を編集して扱う際に、「この問題になるとすぐ熱くなる」といった印象を周囲からもたれること。自分達の問題を当事者に質問することは当然のことと思うが、うがった見方をされる
行政マンといった、〇〇マンという女性を除外した呼称は無くした方がいいと思う
子育てや家族などのテーマとは関係のない記事で、取材相手のプロフィール欄に「2児の母」のような記述があり疑問を感じた。肩書きだけで十分だと思うので、なくてもいい情報だなと思った。男性の記事に「2児の父」のような記述はあまり見かけない。ご年配の男性社長の記事で「孫5人」などは見たことない。結婚や子どもの情報を書く意義が分からなかった
事件の被疑者を「男／女」と表記すること：「男性／女性」と書き分けることの必要性や、性自認等が画一的な男性／女性に当てはまらない人が該当する場合にどう表記すればいいのか迷う（その後、「男／女」の表記を控えるよう通達が出た）
文化部署にいるが、寄稿者、賞の選考者は圧倒的に男性が多い。そこも変えていこうと努力している。（勤め先がバレますが）毎日新聞芸術賞の選考員は全員男性。他社でも、女性はいてもアリバイ作りの一人、というケースが多いのでは。多様な構成にしないと、選ばれる人の属性も似かよってしまうだろう。そしてその受章者が力を持ち、また選考員となり、偏ったジェンダー意識を再生産することになりかねないと危惧する
例えば「女優」という言葉は使うなといったことにはくみしない。「固定化」はよくないというが、性別は性別として示す言葉は排除したくない。要は使い方、表現の仕方なのだと思う。それが一番難しいのだが……
人それぞれだが、女性が取材対象者だと年齢や生年月日を尋ねると嫌がられる頻度が高い。支局時代に、そうした理由から「年齢を教えてくださいませんでした」と上司（中年男性）に打ち明けると、なぜだと詰問された記憶がある。年齢が入っていないという理由だけでコメントが丸々削られたこともあった。ルールだからと特段考えずにやっていることでも、一つ一つ見直していくべきではないか
「男らしさ」「女らしさ」という広く共有されている概念はどうしても存在する。そこに立脚した原稿や記事を避けていく、ないしは平等化していくことがまだ不十分かと思う
以前、小学生のみ敬称を「君」「さん」と分けていることについて指摘したことがあったが、変わらなかった。取材は性別を聞くことができず、先生に確認したり名前でも推定して書いたりしていたことが多かった。だが、そのことをコラムに書くと、読者から意見があり小学生の敬称が「さん」に統一されることとなった。結果的には良かったが、読者の「外圧」によらず、社内の議論によって改称されるべきではなかったかと考えている
現在でも「ハイサイ／ハイタイ」や、匿名時の年代＋性別の表現など「男／女」ということを前提とした表現が残っている。必要ない物であれば廃止していければと思う
例えば、ノーベル賞の受賞決定時の男性受賞者の妻の描き方。読者としてどんな奥さんなのだろうという興味はないことはないと思うが本筋ではない。会見に同席してもらった必要性はあるのか？ 内助の

4. 日頃、編集職場で仕事をしながら、ジェンダー平等に関わる表現について、取材や執筆活動において、問題だと思うことを自由にお書きください。主なものを抜粋

功が強調され過ぎていないか？疑問に思う
必要のないのに男性か女性か特定すること
編集内部で、ジェンダー平等に反する言動が多く、やっていることと書いていることが違うのが不思議ではない
「女性らしさ」だけでない、「男らしさ」などの男も縛る固定観念
ジェンダー平等はとても大切なテーマだと分かっているつもりですが、記事を見るたび、どこまでがジェンダーの問題で、どこまでがその人個人の問題なのか、判然としない気分になります。「女性ならではの視点」「女性に向いている〇〇」という表現もよくみますが、女性だからなんだろう、いや、その人だからこそなのではと考え込んでしまって答えが出ません
個々人の見方や価値観にばらつきがあるので、社として最低限のスタンダードを示す必要があるかもしれない
橋本聖子さんが東京五輪組織委員長に就任するプロセスでも、女性蔑視発言があったから、次は女性ありきで進められたと感じる。女性だけに限らず、例えば障害者だから取り上げる、という話題にも、その人の一つの属性を捉えて、という問題が潜んでいると思う。取材や記事の中でも、取材した人の多様性を意識しながら書かなければいけない、難しさも感じる
夫婦を書く際に妻が主人公の場合は別にして、基本的に夫が前に来る点
若い女性が望まぬ妊娠をし、子どもを遺棄したり殺害したりする事件について。ふしぎと、その女性と性行為をし、妊娠のきっかけとなったはずの男性のことには言及されないことばかりである。また見出しも、母親・女性の行った行為ばかりを大きく見出しにとりがちだ。これは、「子どもに関する痛ましい事件には、母親・女性側により大きな責任がある」という、いまある偏見を助長するし、また痛ましい事件を起こすのに加担したはずの男性の存在を透明化するものであり、問題があると思う。 また、性的少数者を取りあげる記事で、ある個人について「LGBTである」という表現に出くわしたときも、おかしいなと思った。「レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー」という複数のセクシュアリティの頭文字をとったものが「LGBT」なのであり、ある個人に対して「この人はLGBTです」とは言えないはずである
同じスポーツでも、男子スポーツばかり大きく報道するところ
以前から気になっているのは「女子力」「女性ならでは」という言葉。取材対象者が積極的にPR材料に使うことも多いので、自分も使ってしまうことがある。ここ数年のジェンダーバイアスの見直しによって急速に「古い」言葉になりつつあるので気を付けたい。キャッチーなので見出しにも使われている。LGBTQ（性的マイノリティー）の表現も、理解せずに使っている人が多い。「彼（彼女）はLGBT」など
使い古された旧態依然とした表現の慣用的な使用
男性優位は最早、時代錯誤でしかないが、一方で女性は絶対的な善で男性は絶対悪という論調の人が多くの記事を出して、男性の口を封じることになっていないだろうか？
デスクですら、逆切れで指摘を諦めざるを得ないこともあると聞くので、冷静で落ち着いた環境での議論ができるようにしてほしいと思う

4. 日頃、編集職場で仕事をしながら、ジェンダー平等に関わる表現について、取材や執筆活動において、問題だと思えることを自由にお書きください。主なものを抜粋

他社媒体のインターネット見出しなどで「美人」とつけるケース。最近だと内閣広報官の例など。大手新聞社系の雑誌媒体発の記事でもこうしたケースが散見させる。女性の職業人やアスリートに対して見た目は関係のない問題であり「美人」という表記は適切ではない。こうした表現がまかり通るのは問題だ

自社も含めて、男女の社会的役割を固定化する認識が根強い。例えば家事育児を男性がする場合、「妻に代わって」「妻を手伝って」とすると認識されるケースもあるが、そう考えたり表記するのは適切ではない。家事育児は女性・妻の役割だと決まっている訳ではない

男性の育児について「育児が苦手なヨチヨチお父さん」のステレオタイプで描くべきではない。男性の育児参画も以前より進んでおり、主体的に育児を担う男性も少なくない。例えばお父さんの育児悪戦苦闘記は面白いかもしれないが、「父親は育児が苦手」というイメージを社会に対して植え付ける可能性もある。父親が育児現場で直面するジェンダーの壁は問題化すべきだが、男＝育児が苦手、ではない

言葉、文章を扱う新聞社として、多少ふるくさい、堅苦しい、言葉狩りという批判を受けたとしても、「夫を主人というのはどうなのか」「なぜ俳優と女優と区別するのか」などの問題提起をしてみたり、新聞記事を検証しておかしな表現の自己検証をしたらどうか。いまだに「嫁ぐ」「嫁に行く」「女性らしい細やかな視点」という表現を記事で見る。男性デスクは指摘すれば直すが、指摘するまで気づかない

街頭で声を取る取材において、匿名の場合、女性会社員、男性公務員などと表記するが、取材時に「性別は？」と聞いているのだろうか。職業や肩書きはきいても、性別については主観に基づき「女性ですね」と念押しするか、若しくは見た目ですう決めつけていないか。先日、LGBT当事者の支援活動をされていていらっしゃる方と意見交換した際に指摘を受けたことがある。コロナ禍の様々な相談機関の記事で、「30代男性は～」などと表記があると、『男性か女性かなどと性別がはっきりしていないと相談できないのだろうか』という不安を抱く人がいる」という。匿名の場合にこれぐらいの表現なら問題ないかと私自身思いこんでいたが、それが相談への心理的ハードルになっているとすれば、改めたり、工夫したり必要があるのではないか。一概に答えは出せないかもしれないが、そうした視座を共有することは第一歩だと思う

写真での女性起用や、夫婦紹介で夫が先など、無意識に習慣化していることがたくさんあるとあらためて気付いた。まずは無意識のジェンダーバイアスを意識することからだと思う

性犯罪の報道は発生時にはネットを中心に積極的に流す一方で、後にフラワーデモにつながった無罪判決の記事がベタなど、価値判断の場に女性がいなくなるのだろうかと感じてしまう

スポーツ紙のお色気面はいつまで残っているのだろうと疑問。スポーツ紙の職場で働く女性組合員の声を聞いてみたい

問題ではなく改善された点では、児童への敬称を「くん」「さん」から「さん」に統一されたこと。その他、弊紙では初めて職業として「主夫」の表記を出せた。「〇〇女子（男子）」という呼称は、本来男性（女性）が興味を持つことに、興味を持つ女性（男性）という意味合いが含まれているのではないか。また、イクメンや弁当男子なども間違った呼称だと思う

山田広報官に関する報道で「飲み会を断らない女」という自称が目立って本紙も報道したが、これが「飲み会を断らない男」ならばニュースにならない。成功したキャリア女性が7万円の接待を受けていたことがわかり、その属性ゆえに大きく報道されたのではないかと感じる

4. 日頃、編集職場で仕事をしながら、ジェンダー平等に関わる表現について、取材や執筆活動において、問題だと思えることを自由にお書きください。主なものを抜粋

森（元総理大臣）のような人が社内のあるところにいる。ジェンダー表現の問題点を指摘してもピンときていないし、性差別的なコラムがノーチェックで掲載されSNSや電話で抗議されるなど「炎上」したこともあった。原稿をチェックする立場に女性がいないことが一因だと思う
意思決定の場を牛耳るのはジェンダー感覚が鈍麻しきった「おじさん」たち。一部の若い記者は危機感を持っているが、彼らは編集会議に参加できない。非常に危うい状況だと思っているし、おじさんたちには頭の中をいい加減アップデートしてもらいたい。もはや自浄能力はないので、外圧が必要だ。▽朝日新聞のようなジェンダーに関する宣言を新聞労連が音頭をとって地方紙やブロック紙もするように促す（そして発表する）▽ジェンダー講習を実施する▽ダイバーシティを推進し業績を挙げたメディアの事例を紹介する（あまりないかもしれないが…）など外から働き掛けてほしい
弊社の場合だが40代後半からそういった配慮の発想がないように思える
問題だとは思わないが、女子→男子の順で書かれたスポーツ記録のFAXを、そのままの順で掲載するか、「男女」に直すかを迷うことがある
行事ものの写真の選択で、女性や子どもの写真が選ばれる傾向がある。わざわざ撮り直しや出し直しを要求することも多い。スポーツ記事において、女性の場合だけに結婚後も競技を続けることがクローズアップされたり、競技そのものとは関係のない容姿に注目した記事が多い
女性の権利について、取材の場でも社内でも男性が何か意見してはいけない雰囲気になっていることを懸念している
女性に対するインタビューだったので、敬称を「さん」としたが「氏」に直されたことがある。また、文中にコメントを引用する際にも、である調では発言が男っぽくなってしまうと覚えることがある。ただ、これは昔のことで、いまは女性にも「氏」と付けることが当たり前のように思う。それでも、女性らしい表記にしたいと思うこともあるが、これ自体が「平等」じゃないということなのかなとも感じる
取材対象者が児童の場合、敬称を男児が「君」、女児が「さん」と表記していること
些末な話で申し訳ないが、農業系の記事で「〇市のAさん方でニラの収穫が最盛期を迎えている」という表現をするが、世帯主で土地名義人がAさんだが、ニサの栽培主体者はAさんの妻やAさんの娘である場合も、記事中表示は前記のようにすることを求められる。実態にそぐわないが、定型となっている簡潔な言い回し比べ、回りくどい表現しかできないという理由で原稿が修正される